

シュービナ、オーリガ・アrikシエヴナ

サハリン南部アホーツカヤ3多層集落跡のかまど付き住居群（2000・2001年の発掘調査結果）

『サハリン博物館報』第11号、ユジノサハリンスク、2004年

Шубина, Ольга Алексеевна. Жилища с печами на многослойном поселении Охотское-3 на Южном Сахалине (итоги археологических раскопок 2000-2001 гг.).

Вестник Сахалинского музея No.11, Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей, 2004. 179-206.

第2部 「石で組んだ煙道を持つかまどの記載」（原著189ページ冒頭）から末尾まで

石で組んだ煙道を持つかまどの記述

アホーツカヤ3集落跡では3基の住居（45・47・75号）では、石で組んだ、外見上上記のかまどとはかなり異なるかまどが発見された。まず2000年に75号住居で石組かまどが発見された。かまどは住居の掘り込みの南側の肩に、住居南東の角から約1.3mのところのところに築かれ、壁と直交して北西-南東方向に伸びる（図11）。全長は1.5m、燃烧室の幅0.5-0.6m、煙道の幅は約0.4mである。板状の石で組んでおり、恐らく石に特別の加工は施していないが、適当な形と大きさのものを選択しているようである（図12）。外見上、単煙道型のカン〔炕、中国東北地方や朝鮮半島の住居に造りつけた暖房装置、オンドル〕を思わせる構造であるが、それとは異なって建物内部でなく、実質完全に住居の掘り込みの範囲外にあり、また水平に位置するのではなく傾斜しており、燃烧室の基部と煙道末端の板石の間には約20cmの高さの開きがある。家の内部には、わずかに壁際に暖炉〔камин、石や煉瓦積み厚い壁の中に燃烧室があるタイプ〕のような形式の燃烧室があるだけだった。

燃烧室は径0.5mほどの覆いのつかない炉の状態、両側は板石を垂直に立てて囲っており（図13）、板石は脆くなり、赤褐色に灼けて熱の影響のあとが認められた。



図11 石で組んだかまどのあるアホーツカヤ3集落跡75号住居 北から



図 12 アホーツカヤ 3 集落跡 75 号住居の石組みかまど 南西から



図 13 アホーツカヤ 3 集落跡 75 号住居の石組みかまど 北から

かまどは住居の掘り込み中央部の床面より 15~17cm 高いレベルに構築されており、従って炉の変色部分と燃焼の産物（炭、灰、焼けた砂）が溜まった範囲の上面は傾斜している。焚き口部分では厚さ 15~17cm に達している。燃焼室の下の砂層は深さ 20cm まで焼けており、かまどが高温で機能していたことを示している。酸素を吹き込むための特別な装置が用いられた可能性もある。

煙道は垂直に立てた板石を平行に 2 列、4 個ずつ並べて作られ、上を板石で水平に覆い、その構造の全体を厚さ 1~2cm の粘土で塗っている。粘土は焼けておらず、明灰色ないし黄灰色を呈している。煙道の垂直な側壁に用いられた板石の寸法は長さ 28 から 29cm、高さ 10 から 24cm、厚さは 3~5cm から 6~8cm である。

煙道の幅は約 40cm、長さは約 1m である。

煙道の奥側（南側）は小さい寸法の石で組み、その配置からみて煙を排出する管を囲んで設置され、この管を固定するためのものであったと判断される。つまり、石の間には大きくはないが明らかな石組みの隙間が認めら



図 14 45号住居の石組み煙道つきかまど 石組みの解体前の状況、アホーツカヤ3集落跡、北から。



図 15 45号住居の石組み煙道つきかまど 発掘中の状況、アホーツカヤ3集落跡、北から。



図 16 45号住居かまどの石組み煙道の外側部分 南東から



図 17 粘土のレンズで塞がれた石組み煙道のある 45 号住居のかまど アホーツカヤ 3 集落跡、東から。



図 18 煙道掘り方の開口部に粘土で「基礎工を施した」  
45 号住居のかまど アホーツカヤ 3 集落跡、東から

れ、径 0.2m ほどのその隙間に不均質な黄褐色の砂が詰まっていた (図 12)。これらの石の上面は現在の地表面の高さに位置し、その一部はすでに草の根の層の上面の草と落葉を除去した時点で検出されたので、住居が使われていた時代には煙道は直接地表に開口していたと言ってよい。

かまどの石組み構造の全体は古代の地表から明灰色のポドゾル性の砂質土層に掘り込まれた幅 0.6-0.7m の溝の中に納まっており、石の下辺は基盤の鮮黄色の粗粒砂層に 3-5cm 足らず食い込んでいるものの、かまどの構造は事実上基盤の砂層の上にある一方、住居の壁面は灰色のポドゾル層 (古代当時の地表) を掘り抜き基盤層を 10-15cm 掘り込んでいる。かまどの基底の下に人為的に土を盛った形跡はなかった。このかまどは住居の文化層からひと塊に切りとられ、修復のうえサハリン州立郷土誌博物館の収蔵品となった<sup>7)</sup>。

2001 年には 45 号・47 号住居の発掘でさらに 2 例の石組みのかまどが発見された。その構造と規模は全体として上記の 75 号住居のものと同様である。どちらも南側の壁面にとりつき、堅穴の肩を切り通しており、住居内の燃焼室と住居の範囲外に伸びた石組みの煙道から成っている。しかし、45 号

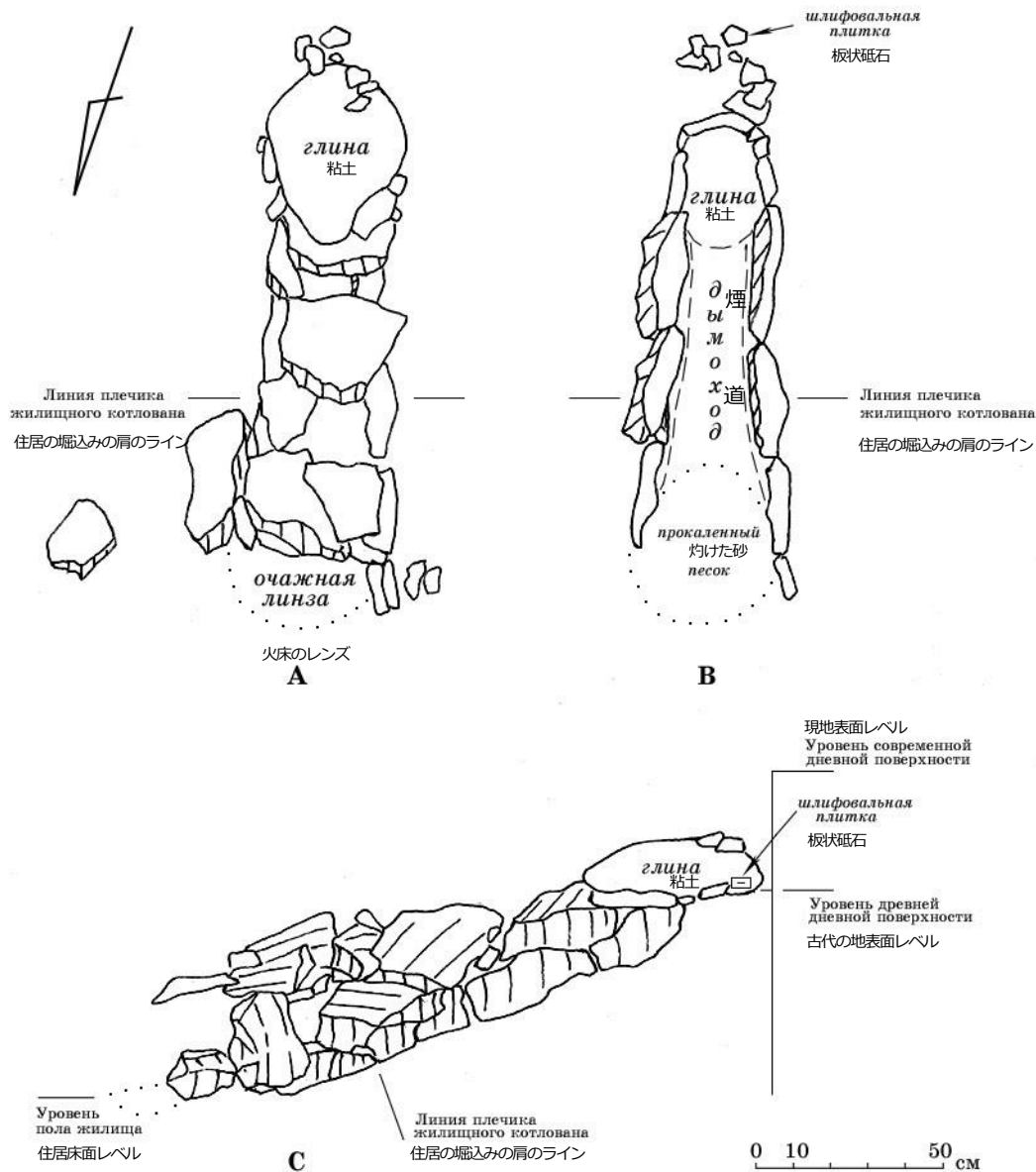


図 19 アホーツカヤ 3 集落跡 45 号住居の石組み煙道のあるかまどの平面・地層断面図  
 A : かまどの石組みの平面図、上から。B : 上面を覆う板石を外した後の煙道の溝の平面図。  
 C : かまどの石組みの状況、西側側面から。

及び 47 号住居がより深いことと関連して、燃烧室を囲む板石と煙道の地表への出口との間の高さの開きはそれぞれ 0.4 及び 0.5m を測り、このため石組みの煙道はかなり急角度で上昇し、45 号住居でこれが著しいほか（図 14、15 及び 19）、煙道の奥は次第に狭まり、末端は垂直に立った板石で半円形に囲った奥壁を形成している（図 16）。煙道の板石は内外両面が厚い粘土の層で覆われており、その内部の空間は幅 15 から 22cm である。45 号住居のかまどの特徴はまた、煙の出口の管の部分が 20~22cm の高さにわたって混じりけのない粘土で塞がれ、さらにその上から大きさ 0.35×0.45m、厚さ 10 から 14cm の粘土のレンズで蓋をしていた点にあり（図 17・18）、それは疑いなく意図的に行われたものであった。恐らく住居の主は自分の家を放棄する前にかまどを「保存処理」したのである。煙道の奥の基底では、末端の筒を固定している石の間に小さな板状の砥石が発見され、やはり意図してここに置かれたものである（図 19）。二つの事実から、ここで我々はかまどの「埋葬」にかかる固有の儀式に遭遇したのであり、この儀式は住居に関する固有の宗教的観念に関係があると考えられるかもしれない。



図20 石組みの煙道と粘土で築いた燃焼室をもつ  
47号住居のかまど アホーツカヤ3集落跡、北から

なされ、その際どのかまどでも、恐らく手近な産出地で入手した材料が使われていたことを、どの住居の発掘でも粘土の色調や組織が同様であったことが物語る（とはいえ、この問題についてはなお検討を追加する必要があるが）。石組みのかまどの素材に関しては、砂岩の板石はヴィゴダ山麓のオホーツク海岸の、アホーツカヤ3集落跡の北およそ2kmにあるこの石材の露頭から集落へ持ち込まれたことが確認されている。この砂岩層の露出面



図21 石組みの煙道と粘土で築いた燃焼室をもつ47号住居のかまど  
アホーツカヤ3集落跡、北東から

い。言うまでもなく、この仮説はさらに入念な検討を要するものである。

47号住居のかまどの特徴は、そこで二つの構築手法が結合されている点にある。煙道は長さ約1m、幅0.25~0.3mで砂岩の板石で組まれているが、燃焼室の構築法は粘土で築いたかまどに類して幅広く（基底で0.5~0.6m）、天井部は植物質の骨組みの上に粘土を上塗りし、天井部の入口部分は壁に板石を埋め込んで固めているが（図20・21）、天井の上部は調理用の器を掛ける穴の場所に径約20cmの円形の変色部が確認された（図22）。

全体として石組みの煙道を持つかまどの構造は、外見上の相違にも関わらず、粘土で築いたものの構造と基本的な部分での違いはない。つまりすべてのかまどは堅穴の壁面に作りつけられ、燃焼室は屋内にあり、煙道は徐々に上昇して、恐らく木製の管を介して地表面へ開口していた。かまどの排煙経路を傾斜して配置する方法によって燃焼室で熱せられた空気は下から上へより効率的に移動することとなり、通気を改善していた。石組みには粘土で上塗りが

には古代の（恐らくは新生代の）二枚貝や植物の化石が含まれているが、これと同じものは石組みの煙道の材料となっている砂岩の板石の破面にも見られるのである。

石組みのかまど施設の構造は、中世期に極東南部の大陸部の諸民族の間に広く分布するようになった導熱管のシステムのうち早い時期の形態を思わせるものがある。カンの早期形態

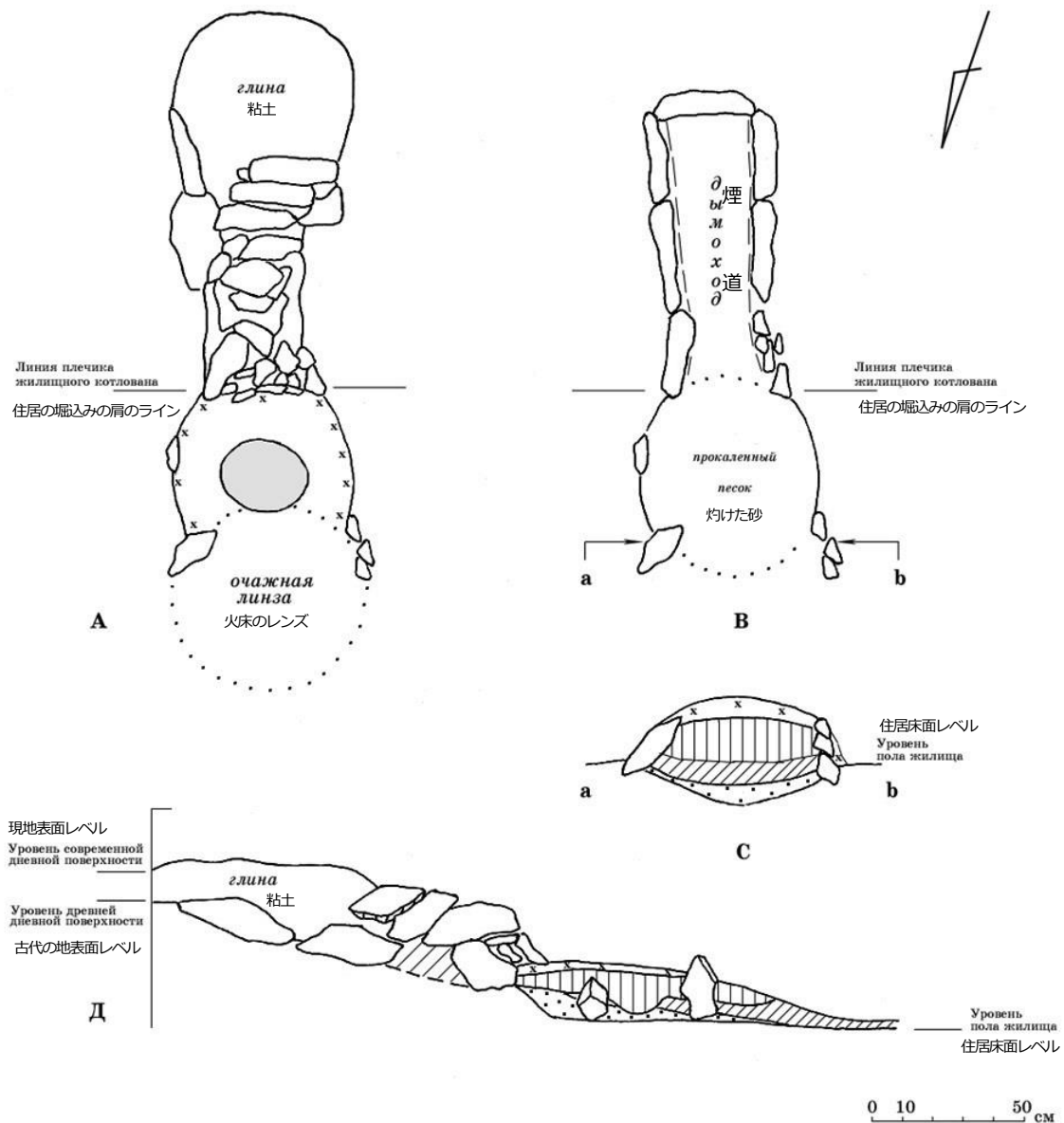


図22 アホーツカヤ3集落跡47号住居のかまどの平面・地層断面図

A: 粘土で築いた燃焼室と石組みの煙道のあるかまどの平面図。B: 上面を覆う板石を外した後の煙道へ続く溝の平面図。C: 煙道の石組みと粘土で築いたかまど燃焼室天井部の状況、東側側面から。

は文化的にも年代的にも帰属がはっきりしていて、前3~4世紀から紀元後1~2世紀の沿海州早期鉄器時代のクロウノフカ文化の遺跡で確認されており<sup>8)</sup>、その後沿海州、アムール川流域及び中国北部の諸地域で広範な発展を見せた。複雑化の程度によってカンはいくつかの形式に区分される。もっとも簡単な単線状のカンはまっすぐな長さ1から1.5m、幅15~25cmから40cm、高さは30~35cm未満の導熱管であり、垂直な板石とそれを覆う水平な板石から成り<sup>9)</sup>、この構造の上に粘土が塗られていた。カンは住居の床に位置し、床の中央部にある炉から住居の一方の壁に向かっていった。クロウノフカ文化のカンの構造にはサハリンの石組み煙道つきのかまどとの外見上の類似が存することを認めつつも、この二者に原理的な違いのあることを考慮せざるを得ない。まず第一に、住居の目指すものの原理が別であり、それに応じて機能の方向性も異なる。クロウノフカ文化と中世のカンは屋内に位置しており、炉の煙を石組みの管に通すことで暖房の役割を果たした一方、サハリンのかまどの場合石組みの構造は排煙の役割を果たしていた。かまどは竪穴の肩に取り付けられ、炉は壁面付近にあって、傾斜した煙道

(20 から 50cm の比高がある) が家屋の範囲外に出ていた。

沿海州とアムール川流域では単純な形態のカンから中世の住居暖房のための複雑な導熱管システムへの発展が確認されているが<sup>10)</sup>、サハリンでは中世にこうした住居暖房のシステムが分布することがなかった。10~14 世紀に及ぶ巨大な年代学上のヒアタスがクロウノフカ文化のカンとサハリンの石組み構造を持つかまどを隔てており、両者の間にいかなる文化的交渉も論じることはできない。恐らく、熱を扱う施設に板石を使用するアイデアは、サハリンのかまどの場合も極東のカンの場合も、異なる文化の間での収斂現象として生じたものであろう。

#### 住居の出土品

住居の居住時期を決定するのに役立つことが期待できる考古資料は非常に少ない。最も興味ある出土品として次のようなものを挙げておきたい。

#### 粘土で築いたかまどを持つ住居の出土品

10 号住居。住居の床面で非常に細粒の明灰色の粘板岩製の煙管の破片(火皿、図 23 の 1)が発見され、住居周囲の空間では古代の地表のレベルで黒色軽量の岩石、つまり黒玉か石炭製の環状石製品の破片がみられた(図 23 の 2)。同様なものがアジョールスク 1 集落跡では 5 号住居上層の発掘の際、多数の金属製品、穿孔のある骨製の板状製品、青色のガラス玉、「内耳」式土器、南唐朝が 959 年に発行した銅銭を伴う遺物群<sup>11)</sup>の中で複数発見されている。堅穴覆土の文化層と住居周囲の空間では、オホーツク文化の後期段階の特徴を持つ製品が少量、つまり大型のナイフ状の玄武岩製石器 1 点と破片 2 点(図 23 の 4-6)、砥石の破片、オホーツク文化のものとみられる土器の細片少数(図 24 の 1)などが発見された。

41 号住居。鈹滓や鈹滓混じりの焼け土、かまどに塗った粘土の破片といったものの小片で埋まった住居の床面では、明灰色できらきら光るうろこ状の微細な(1~2mm)金属片、金床と思われる大きな石、腐食した鉄製品の残骸などが見られ、アジョールスク 1 集落跡で発見されたものに類似した穿孔のある板状の骨製品の破片(図 23 の 8)、はっきりと金属器を研いだ痕のある板状の砥石片(図 23 の 7)が発見された。

46 号住居。住居の床面で木製の柄のついた鉄製ナイフ(全長 16cm、刃渡り 10cm、幅 1.5cm)と 1009 年に発行された宋代(北宋朝、960~1127 年)の銅銭(図 26)が発見された<sup>12)</sup>。古代の地表面と、また稀には住居の掘り込みの覆土でも、細かく砕けた「南貝塚」式の土器片が見られる(図 24 の 5・6)。

74 号住居。腐植した鉄の残骸を除いて出土品はない。

石組みの煙道を持つかまどのついた住居では次のような出土品があった。

45 号住居。古代の地表面では「南貝塚」式土器片が見られ(図 24 の 2・3)、住居の覆土では地表への出口となる斜路のそばで径 1.8cm の円形で透明なガラス玉が出土した(図 23 の 3)。

47 号住居。古代の地表面と住居の掘り込みの肩が崩壊した堆積の中で平行沈線文、水平及び斜行した刻文のある土器片が見られ(図 25)、かまどのそばの床面では同一型式で小型(高さ約 10~12cm)、体部が張り出し頸部が締め口部が広く外に開いた無文の壺形土器 2 個体の破片が発見され、装飾としては胴の中ほどに相互に 6cm の距離を置いて先の尖った貼り付けというか「瘤」が突き出ている(図 24 の 4)。土器の製作技術の特徴はオホーツク文化後期のものに近いが、こうした形式のもの類例は今のところ明らかになっていない。型式学的にはこれを 10~11 世紀のものと言えるかもしれない。

75 号住居。住居覆土の上面付近で粗雑な厚手の、「内耳」式の「内側に耳のついた」口の開いた容器のものかと思われる土器片の集中が発見された。[かまどの]火床の堆積物の清掃に際して赤漆塗りの木製容器の漆膜の細片(約 1mm)が出土した<sup>13)</sup>。

住居の多くで火床の堆積物の清掃に際して焼けた貝殻や魚骨の細片が含まれているのが判明し、また床面や覆土では散発的に貝殻(ウバガイ *Spisula sachalinensis*、ホタテガイ *Mizuhopecten yessoensis*、イガイ *Crenomytilus grayanus*)と魚骨が出土した。46・47 号住居周囲の空間では動物遺体が発見され、これは哺乳類(生後 6~17 箇月の豚 *Sus scrofa inoi*)の歯の破片であった<sup>14)</sup>。



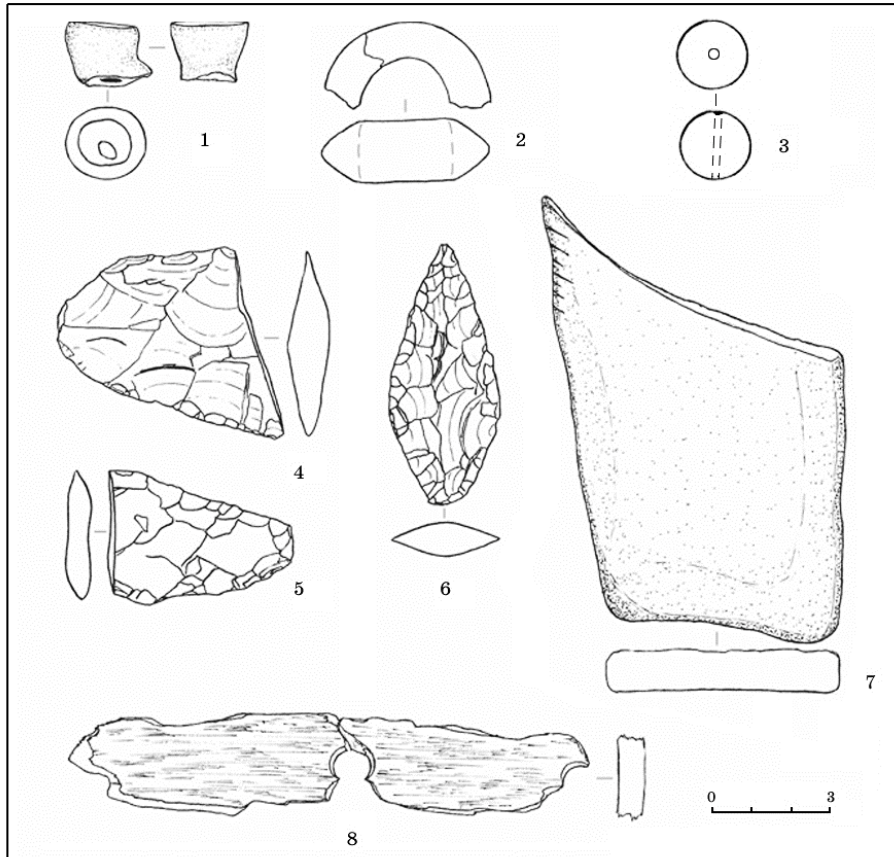


図 23 アホーツカヤ 3 集落跡文化層発見の遺物  
 1・2・4~6: 10 号住居 3: 45 号住居 7・8: 41 号住居

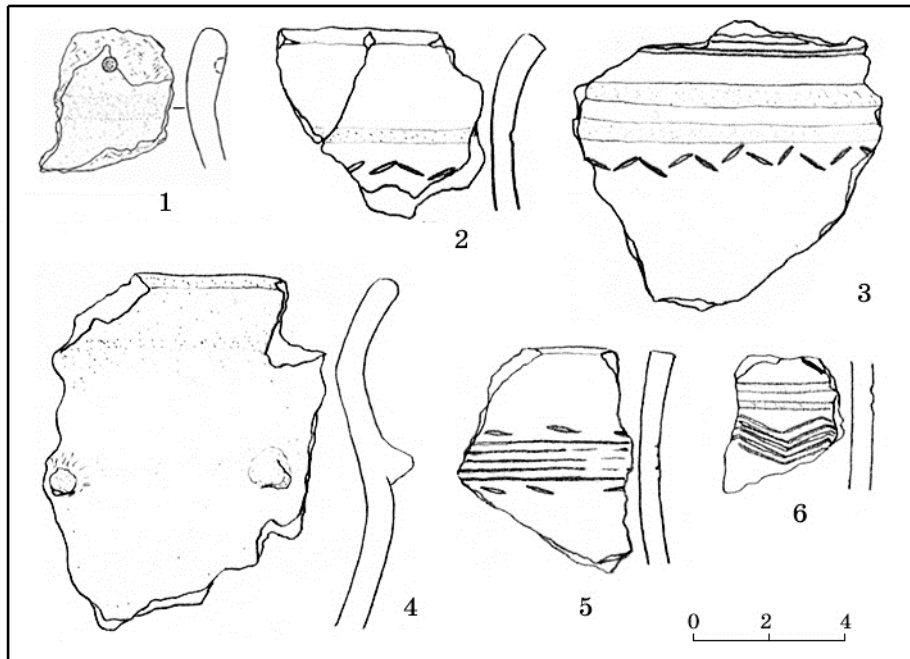


図 24 アホーツカヤ 3 集落跡文化層の土器片  
 1: 10 号住居 2・3: 45 号住居 4: 47 号住居 5・6: 46 号住居

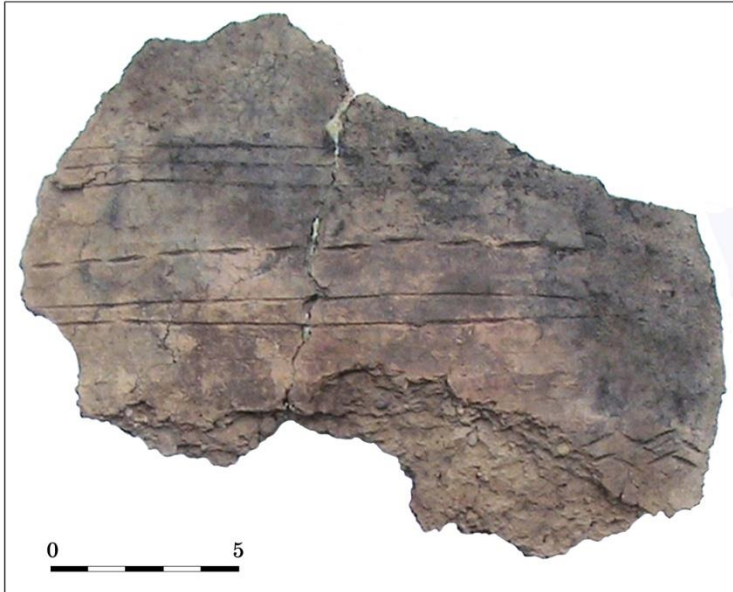


図 25 (左) アホーツカヤ 3 集落跡  
47 号住居覆土出土の土器片

図 26 (上) 1009 年発行の宋代の中  
国の銅銭 アホーツカヤ 3 集落跡  
46 号住居発見

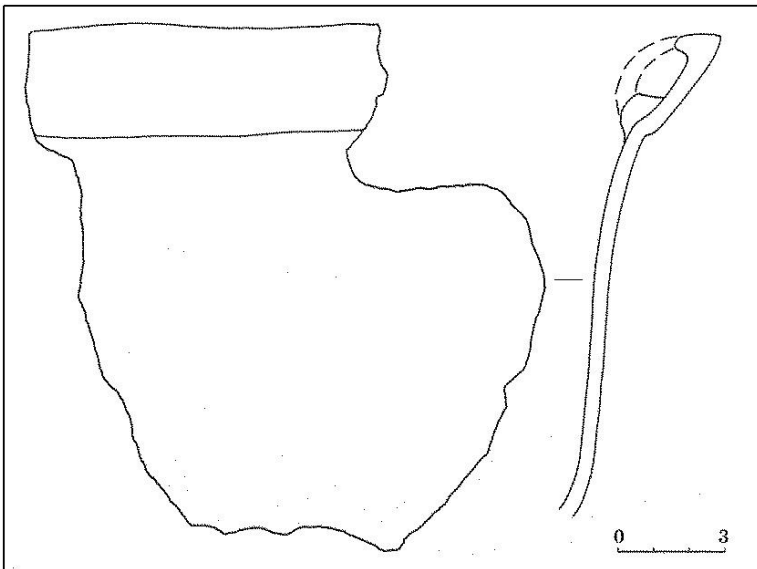


図 27 鉄鍋片 アホーツカヤ 3 集落跡 47 号住居周辺発見

居住の所産の年代決定  
文化層の厚さが取るに足らず、人工・自然遺物の密度も低いことは住居の使用が短期間のものであったことを物語っている。発見された出土品の構成と住居にかまどの存在することから考えて、住居群は新しい時期のものであり、住民はすでに鉄器に親しみ、一方生活用具には広く木、樹皮その他の有機質素材をあてていたと推論することができる。遺物の数が少ないことはまたその他の要因によって説明できるかもしれない。つまり住民が粛々と住居

を放棄しており、壊れていない道具や貴重品、生活用具はみな運び出されたということである。後者は間接的ながらかまどの「埋葬」儀式の痕跡によっても示唆されるところで、煙道の出口は粘土で塞がれるか覆われており、火事の痕跡はなく、そして住居の保存状態は比較的良好い。

恐らく、アホーツカヤ 3 集落跡のかまどのある住居複合は複数の時期にわたるものであろう。放射性炭素による年代測定は今のところ 3 件の木炭資料について実施されたに過ぎないが、次のような結果を示した<sup>15)</sup>。

41 号住居の床面の層と、粘土で築いたかまどの燃焼室の堆積物に由来する木炭の試料 2 点から得られた年代は整合している。

COAH-4816 1,245±40 年、較正暦年 715~755 及び 830~880 年。

COAH-4817 1,225±55 年、較正暦年 730~770 及び 890 年。

測定年代は互いに近似しているが、較正に際して<sup>16)</sup> 41 号住居の居住年代として 8 世紀中ごろと 9 世紀末の 2 つの可能性が生じている。年代のばらつきは住居の暖房に使われた木材の年代それ自体が異なることによって説明できるかも知れない。

第3の試料は46号住居の粘土で築いたかまどの焚口そばの、燃焼室から飛び散った炭化物集中から採取され、次の年代を示した。

COAH-4818 950±45年、較正暦年1030~1070年。

この年代は住居で発見された中国の銅銭の発行年である1009年と十分な相関を見せ、確信をもって住居の年代を11世紀中ごろと判断できる。

45・46・47号住居が一連の発掘区の中で発掘された際、46号（粘土で築いたかまどを有する）の一部が隣接する45・47号（石組みのかまどを持つ）の構築の際掘り出された土で覆われていることが明らかにされたので、45・47号は恐らく同時期に、そして46号の少し後に居住されたものであるが、時期的な隔たりはそれほど大きくなかったとみられる。放射性炭素年代測定を考慮すると46号住居の年代は11世紀中ごろに置かれ、隣接する45・47号は11世紀末から12世紀と判断される。このことは「南貝塚」式土器片のあり方によってある程度確かめられ、この種の土器片は住居の間の空間にある古代の地表面で見つかる土器の中では主体を占めているが、住居の中では、47号住居の土器だけをその例外として、完形または完形に復元できる土器、さらには土器の断片でさえ1個体も出土していない。

発掘の過程で、47号堅穴住居は2回にわたって使用されていることが判明した。堅穴の北東側の肩の下に約1×0.8mの大きさの焚火の痕が発見され、両側に粘土で囲った間に細かい炭の破片と上塗り粘土の破片を交えた焼け砂のレンズ状堆積が見られた。この堆積の下部に小さい礫の並んだ薄い層と、厚さ約2cmの混じり気のない粘土のちょっとした堆積が検出された。この施設の上部には径約0.2mの円形をした変色部があり、暗褐色の炭混じりの砂質粘土が堆積していた。これは粘土で築いたかまどの「コンロ [容器の掛け口]」に類したものである。長軸方向の地層断面を検討した結果、この施設は住居の床面より25~30cm上位に位置していることから、人が住んでいた時期の住居に直接関係するものではないことがわかった。焚火の箇所にある炭混じりのレンズ状堆積は8~10cmの厚さがあり、住居の掘り込みの肩の斜面に沿って形成されている。上塗り粘土の破片が多数あって、層の中央部が焼け、粘土を置いた縁辺は焼けが弱いか生の状態であること、さらに施設全体の形状からみてこの遺構は粘土で築いたかまどの残骸であり、覆いのないただの焚火跡ではないと解釈できる。このかまどが構築され機能したのはすでに47号住居をその住人が放棄した後のことである。恐らく、このかまどは草の根の層の直下に腐朽した木材のしみとして柱の跡が残っていた建物に関係したものであり、放棄されその時点までにすっかり草の根の層で覆われた堅穴の跡に、この遺跡のずっと後代の住民の手で構築されたものである。47号住居から遠くない草の根の層の下では直径約40~50cm、高さ約15~16cmで体部は上方へ向かって少し開き、底面は平ら、少し外に折り曲げて幅3cmの口縁部を区画した鉄鍋の残欠が検出された。保存の良い破片の一つを見ると鍋の口縁部には内側から細い縦方向の環ないし「耳」が複数取り付けられている（図27）。こうした鍋はサハリンアイヌの生活用具として特徴的なもので、北海道アイヌとの物々交換の対象であり、日本では11世紀から17世紀まで広く見られたものである<sup>17)</sup>。この遺物はこの住居の二度目の、アイヌ期の居住段階の所産に関するものかも知れない。また隣接する41号住居の覆土上部で発見された骨の集積（大きな犬の、概ね解剖学的な位置関係を保った約30点の骨と下顎骨の破片）も同じこの所産に関する可能性がある。とは言えこの鉄鍋と骨の集積が集跡跡のどの時期の居住の産物に帰属するか、結局は明らかではない。

サハリンで粘土で築いたかまどのある住居は、アホーツカヤ3集落跡以外ではサハリンの考古学者A. A. ヴァシリエフスキが率いるユジノサハリンスク教育大学の調査隊によって1988年にスタラドゥプスカヤ3集落跡（3・4号住居）で<sup>18)</sup>、また1991年にはセディフ1集落跡（1・4号住居）で<sup>19)</sup>発見されている。住居の大きさと構築法の特徴は、その中で発見されたかまどの特徴、またこれらの複合に伴う遺物群とともに、アホーツカヤ3集落跡で調査されたものに類似している（スタラドゥプスカヤ3、セディフ1、アホーツカヤ3集落跡の住居の主要な特徴を示す付表を参照）。セディフ1集落跡では粘土で築いたかまどのある2基の住居の発掘資料によってA. A. ヴァシリエフスキはそれらを10~12世紀のものとしたが、それは平行凹線や沈線文・スタンプ装飾のある少数の「南貝塚」式の土器片の存在から推論したものである。スタラドゥプスカヤ3集落跡4号住居では青色

のガラス玉と鋳物の鉄鍋片が出土していることによりそれをアイヌ文化のものとすることができ、これは放射性炭素年代測定によっても確かめられる。測定番号 TIF-250 は  $382 \pm 84$  年を示し、校正すれば 1438~1556 年と 1642~1647 年<sup>20)</sup>、つまり 15~16 世紀または 17 世紀中ごろという 2 つの時期の可能性が示される。

サハリンの粘土製かまどに最も近似した類例は日本の擦文期の遺跡で知られており、ここでは「カマド」の使用が 12~13 世紀まで継続していた。小樽、恵庭及び千歳地域の擦文前期（9 世紀）の住居ではまたサハリンのものに類した石組みの煙道を持つかまども発見されており<sup>21)</sup>、中でも千歳市にあるウサクマイ N 多層集落跡では建設工事に伴う調査の過程で 9 世紀から 10 世紀後半までの年代が与えられる方形で径約 5m、深さ 0.5~0.7m の擦文文化の住居が数基検出されたが、これに火山岩である流紋岩で構築し粘土を塗ったかまどが伴い、床面にはしばしば覆いのない炉を伴っていた<sup>22)</sup>。住居の一つでは 818 年に発行された日本の銅銭が 2 枚発見されている。

サハリンと北海道の住民の間はかなり緊密な接触と相互の影響があったことを考慮すれば、すでに 9 世紀に擦文文化を担う集団の一部がサハリンに到来し、かまどのある方形住居の建築の伝統をもたらしたであろう可能性を考慮してよい。ただし、いまのところこの過程は、サハリンのかまどのある住居で「擦文」式土器が発見される、という形で直接証明されているわけではない。擦文中・後期（10~12 世紀）の土器片は散発的にサハリン島南西海岸部で出土しているが、遺物はごく断片的で数も少なく、合せて約 20 点の破片があるに過ぎない<sup>23)</sup>。

サハリンのアホーツカヤ 3、セディフ 1 及びスタラドゥップスカヤ 3 集落跡で発掘されたかまどを持つ住居の建築上の特徴を分析した場合、注意されるのは次のような特徴である。

1、発見された住居はいずれも掘下げを伴う恒久的な形式の施設であり、新石器時代から 18~19 世紀に至るまで北東アジアの諸民族の間に広く分布していたタイプである。しかしサハリンと同様北海道でもオホーツク文化の住居が原則として 0.5~0.7m 掘り下げているのとは異なり、これらの住居は明らかに浅い。これらの住居は基盤層（つまり当時の文化層より古い地層）を 0.15~0.3m 掘り込んでいるに過ぎず、堅穴から掘り上げた土を利用して盛土した壁面を備え、半地下式建築と地上建築の中間的な位置を占めている。

2、住居は各辺が張り出した方形に近い形態で、稀には隅の丸い五角形している。恐らく、このような形態の建物はオホーツク文化後期の、大型で深い五ないし六角形の住居を特徴としたサハリンの住民と、より面積が小さくて浅く方形の建物をもつ擦文文化の担い手の建築の伝統が混合した過程を反映しているのだろう。

3、堅穴の規模は径 4 から 7.5m の範囲で変異があるが、五角以上の多角形の住居（アホーツカヤ 3 集落跡の 45・47 号、セディフ 1 集落跡の 4 号住居）は深さ、面積とも大きい（それぞれ 26、34 及び 48m<sup>2</sup>）。

4、サハリンの住居の大多数では地上で開口する出口が検出され、幅 0.8~1m の掘り込みが原則として水辺に向けて突出する。住居の床面では柱穴から方形の構成をとる建物内部の骨組みが復元でき、それは垂直の支柱と斜材、及び内側の結合の上に斜めに寄せかけた屋根の構造から成る。

5、粘土と石で築いたかまどの施設は基本的に同一の構造を持つ。いずれも住居の掘り込みの一方の壁面に作り付けられ、燃烧室は壁に接して住居内であって天井部が付き、植物質の材料を編んだ骨組みの上に粘土を塗っているが、煙道は徐々に上昇しながら住居の範囲の外に出て末端には排煙管がある。住居のかまどは屋内の暖房と食物の調理に用いられたが、41 号住居では原始的な、家用の冶金の工程にもあてられた可能性があり、これは冶金に伴う鋳滓と鋳滓混じりの焼けた粘土の出土が物語っている。大多数の住居ではかまどのほかに床面に炉があった。








サハリンにおけるかまどを伴う居住の所産の多くは、考古学的な材料がごく少数しか発見されていないため正確に年代上の位置を決定することが困難である。75 号住居跡で見られた「内耳」式土器は赤漆塗り木製容器の塗膜片とともにこの住居が文化的にアイヌ文化に属することを示唆し、住居の年代は大まかには 17 世紀末から 18 世紀、あるいはさらに新しい時期と判断されることになる。しかし一方で、住居の多くでは明白にアイヌ文化の指標となるものは欠落しており、後期オホーツク文化の土器や石器からは住居の居住時期がもっと古いことが示唆される可能性もある。それはオホーツク文化の終末段階で、サハリン南部の原住民集団が渡来した原アイヌ、つまり擦文文化の担い手たる集団の強い影響を受けていた時期ということになる。

これまでに収集された資料は不足していて、熱を取り扱う施設（かまど）の由来を解明し発展の動態を跡付け、さらにはそれがオホーツク・アイヌどちらかの文化に帰属することを立証もしくは反証することはまだできない。またある一定の期間、後期オホーツク文化の担い手たちとアイヌ集団が共存し、両者が似たような構造の住居とかまど施設を利用していた、という可能性も排除はできない。予察としては、アホーツカヤ3集落跡で上記の居住複合が機能していた年代の上限を9~13世紀に置いてサハリンの後期オホーツク文化を担った住民に関連付けることができる。一方、この集落における活動の年代下限はなお不明だが、それは恐らくアイヌ系民族の文化層に関連することであろう。

#### 注

- 1 ヴァシリェフスキイ A.A.。今日の調査成果に照らしたオホーツク問題（サハリン、北海道、千島列島、1980~90年代）。サハリン国立大学学術紀要、1号。ユジノサハリンスク、2000年。6~12ページ。Okhotsk Culture Formation, Metamorphosis and Ending: Japan and Russia Cooperative Symposium [オホーツク文化の形成、変容及び終焉]。北海道大学総合博物館、札幌、2002年。174ページ（日・露・英文）。
- 2 2002年に札幌市で行われたオホーツク問題についての国際学術会議への報告の中で筆者はアホーツカヤ3集落跡調査の結果の概要を述べている。シュービナ O.A.。2000~2001年のサハリン南部アホーツカヤ3古代集落跡における考古学的発掘。Okhotsk Culture Formation, Metamorphosis and Ending. The 5th Open Symposium of the Hokkaido University Museum。札幌、2002年（日・露・英文）。50~61ページ。
- 3 この遺跡を踏査し目測で地形図を作成しようと試みた結果、博物館職員たちは検束され身元確認を受けたのち、一般市民の立入禁止区域の外に退去させられることとなった。遺跡の発見が学術的に利用されることはなかった。
- 4 収蔵品番号 7122、7123、7124、7176、7177、7178、7179、7180、7187、7188、7189。
- 5 サハリン植物園職員の植物学修士 C.H.チバニェンカの同定による。
- 6 北海道開拓記念館職員の山田悟郎と右代啓視による口頭での教示。
- 7 75号住居のかまどの修復はサハリン州立郷土誌博物館の修復技師 T.B.ビェンスカヤが2001年1月に行った。復元されたかまどは2001年の新蔵資料展に展示され、博物館の収蔵品番号7189として保管されている。
- 8 ブラヂャンスキイ Д.Л.・ヂイコフ В.И.。時代の転換点にある沿海地方。ウラジオストク、1984年。5~48ページ。アクラードニカフ A.П.・ブラヂャンスキイ Д.Л.。クロウノフ文化。シベリア南部と極東の考古学。ノボシビルスク、1984年。100~114ページ。
- 9 ジュッシホフスカヤ И.С.。沿海地方におけるクロウノフ文化の新しい遺跡（プレプリント）。ウラジオストク、1979年。ヴァストリツォーフ Ю.Е.・ジュッシホフスカヤ И.С.。沿海地方キエフカ多層遺跡。1979年の考古学的発見。モスクワ、1980年。197~198ページ。
- 10 チェレヴィヤンカ E.И.。カンのある住居の歴史に関して。シベリア南部と極東の考古学。ノボシビルスク、1984年。アルテミエヴァ Н.Г.。沿海地方女真の家屋建築（12~13世紀）。ウラジオストク、1998年。
- 11 シュービン B.O.。アジョールスク多層集落遺跡の発掘。アムール・サハリン地域の考古学。ウラジオストク、1979年。7~14ページ。銭貨の同定はエルミターージュ美術館の古銭学部門極東コレクション管理者の H.И.イヴォーチキナが行った。
- 12 日本貨幣型録 1995年版（和文）。125ページ、No. 34。アリクシエフ B.M.。帝室エルミターージュ美術館古銭学部門所在の中国銭貨及び銭貨様護符の解説。サンクトペテルブルグ、1907年。32ページ。
- 13 同定は北海道開拓記念館職員的小林幸雄と山田悟郎が2001年に実施した。
- 14 同定は北海道大学総合博物館職員の小野裕子が2002年に実施した。これに対して筆者の深甚な謝意を表す。

付表 セディフ1、スタラドゥップスカヤ3、アホーツカヤ3 集落跡の住居の主要な特性一覧

集落跡 住居番号 発掘年	住居の形態	住居の規模と 面積	入口	炉	かまど	かまど位置	出土品	動物遺体	文化的帰属 年代測定
スタラドゥップ スカヤ3 3号住居 (1988年)	略方形	5.4×5.6m 30m <sup>2</sup> 規則的な柱穴	東壁 かまどの 反対側	なし	粘土で 築く	西壁 北隅寄り	無文土器片、 板状砥石、 鉄小刀	なし	アイス
スタラドゥップ スカヤ3 4号住居 (1988年)	略方形	6×6.3m 35m <sup>2</sup> 規則的な柱穴	南西壁 かまどの 反対側	床面中央 に焚火跡	粘土で 築く	北東壁 北隅寄り	無文土器片、石の み、板状砥石、棒状 石製品(土器の装飾 用具?)、琥珀玉未製 品、青色ガラス玉、 鋳物鉄鍋片	貝殻	アイス THIГ-250 382±84年前 較正後 1438-1556 または 1642-1647
セディフ1 1号住居 (1991年)	略方形 (五または六角 形?)	6×6×0.2m 36m <sup>2</sup>	湖と小川 の側	なし	粘土で 築く		オホーツク式土器 片、板状砥石	なし	オホーツク文化 11-12世紀
セディフ1 4号住居 (1991年)	略方形 (六角形?)	7.6×7.4×0.2m 48m <sup>2</sup> 規則的な柱穴		なし	粘土で 築く	南西隅	オホーツク式土器 片	なし	オホーツク文化 11-12世紀
アホーツカヤ3 10号住居 (2000年)	略方形 	4×5×0.25~ 0.3m 20m <sup>2</sup>	北壁 西隅に近 い	炉2箇所 方形で 0.4-0.45m 粘土で塗 った炉縁	粘土で 築く	南西壁 出口の傍 ら	無文のオホーツク 式土器片、玄武岩製 石器片、板状砥石、 石製煙管片、環状黒 玉製品片	ウバガイ 管状の骨	オホーツク文化 11-12世紀
アホーツカヤ3 41号住居 (2000年)	略方形 	5.6×5.6×0.4m 30m <sup>2</sup> 規則的な柱穴	西壁 南隅に近 い	方形の炉 0.4-0.45m	粘土で 築く	南壁	土器：なし 石器：玄武岩剥片、 板状砥石、台石、 板状骨製品 鉄片、鋳滓	ウバガイ、 ホタテガイ イ、イガイ 魚類(?) イヌ(?)	オホーツク文化 COAH-4816 1,245±40年前 較正後 715-755 または 830-880 COAH-4817 1,225 ±55年前 較正後 730-770 または 890
アホーツカヤ3 45号住居 (2001年)	五角形 	6.4×5.2×0.5m 26m <sup>2</sup> 少数の柱穴	斜路、外 方不明 東及び西 壁	なし	石組み	南東壁	オホーツク式土器 片、板状砥石、ガラ ス玉	なし	オホーツク文化 11-12世紀
アホーツカヤ3 46号住居 (2001年)	五角形 	5.2×4.6×0.3m 20m <sup>2</sup> 少数の柱穴	なし?	焚火跡	粘土で 築く	西壁 北隅付近	オホーツク式土器 片、板状砥石、鉄小 刀、1009年の銭貨	ウバガイ、 ブタの歯	オホーツク文化 COAH-4818 950±45年前 較正後 1030-1070
アホーツカヤ3 47号住居 (2001年)	五角形 	6×6.5×0.4m 36m <sup>2</sup> 規則的な柱穴	斜路、外 方不明 東壁	焚火跡	複合式 燃焼室 粘土、 煙道石 組み	南壁	オホーツク式土器 片	なし	オホーツク文化 11-12世紀
アホーツカヤ3 74号住居 (2000年)	略方形または五角形 	5×5.2×0.2m 25m <sup>2</sup> 規則的な柱穴	なし?	焚火跡	粘土で 築く	南壁 東隅寄り	鉄片	貝殻、鳥 の骨	アイス
アホーツカヤ3 75号住居 (2000年)	略方形 	5.8×5.5×0.4m 32m <sup>2</sup>	西壁	なし	石組み	南壁	「内耳」土器、赤漆 塗膜の細片	なし	アイス

セディフ1・スタラドゥップスカヤ3 集落跡の住居のデータは A.A. ヴァシリェフスキイ歴史学博士の提供によるものであり、これに対して筆者は深甚の謝意を表す。注 18・19 文献を参照。

- 15 アホーツカヤ3集落跡の木炭資料による放射性炭素年代測定はロシア科学アカデミーシベリア支部地学研究所先任研究員の地質・鉱物学修士Л.А.アルローヴァが2002年に実施した。炭素の残留放射性の判定は複列光電子倍增管のベンゼンシンチレーション計測装置で実施された。年代算出に用いた炭素14の半減期は5570年で、年代は1950年を起点として計算されている。
- 16 年代較正は、Г.ピルソンとФ.クヴァの図表によって筆者が行った。Gordon W. Pearson and Florence Qua. High-Precision <sup>14</sup>C Measurement of Irish Oaks to Show the Natural <sup>14</sup>C Variations from AD 1840-5000 BC: A Correction. Radiocarbon. Vol. 35, No. 1, p. 108.
- 17 よみがえる北の中・近世—掘り出されたアイヌ文化—。札幌、2001年。72・101・158ページ。(英・和文)
- 18 ヴァシリェフスキイ A.A.。ユジノサハリンスク国立教育大学考古学研究室第1調査隊のサハリン南部における1988年野外調査シーズンの調査についての報告(ドーリンスク地区及びカルサーカフ地区)。ユジノサハリンスク、1989年。タイプ印刷。サハリン国立大学考古学研究室保存文書。
- 19 ヴァシリェフスキイ A.A.。1991年のカルサーカフ地区・ウグリゴールスク地区における考古学的発掘調査についての報告。ユジノサハリンスク、1992年。タイプ印刷。サハリン国立大学考古学研究室保存文書。
- 20 ヴァシリェフスキイ A.A.。放射性炭素年代測定の集成とサハリン島の考古学的文化の絶対年代。郷土誌研究紀要。ユジノサハリンスク。1995年2号。95ページ。
- 21 北海道埋蔵文化財センター職員の考古学者、鈴木信の口頭での教示。
- 22 田中哲郎ほか。ウサクマイN集落跡の発掘。北海道埋蔵文化財センター調査年報12。1999年。53-58ページ(和文)。
- 23 ブラコフィエフ M.M.・ヂリューギン B.A.・ガルブノフ C.B.。擦文文化の土器とサハリン及びクリル諸島におけるその出土品。ユジノサハリンスク、1990年。